

短歌の輪郭——現代にとって短歌とは何か——

小池 光

内容理解

この文章で筆者は、古典的な和歌の修辭法を捉え直し、具体的に作品をあげてその構造を確かめ、近代短歌の可能性を示している。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

本歌取り——この用語は、〈個〉のオリジナリティを価値の前提とする近・現代短歌では見られなくなつたが、その構造は生き残っている。

〈例1〉ふるさとの訛^{なまり}なつかし／停車場^{ていしゃば}の人ごみの中に／それを聴きにゆく
ふるさと訛^{なまり}りなくせし友^{とも}といてモカ珈琲^{コーヒー}はかくまでにかし

石川啄木
寺山修司

1
両首を重ねることで初めてその2
と言つたほうがいいだろうが、後首が啄木を受けているのは一目瞭然。
に微笑笑できる。

〈例2〉みぞれ降る／石狩^{いしかり}の野の汽車に読みし／ツルゲエネフの物語かな
吊^つるされて玉葱^{たまねぎ}芽ぐむ納屋ふかくツルゲエネフをはじめて読みき

石川啄木
寺山修司

本歌取りとは言い難いが、啄木作を受けて、それに返す3
により、戦後派の野放図な明るさの中に逆転された歴史の継承が浮かび上がり、玉葱をつるした納屋の闇はそれだけ陰影を濃くする。啄木が吹雪の列車で読んだツルゲエネフを、納屋の藁屑^{わらくず}にまみれて今「4
」青年は読む。ツルゲエネフは5
の一致では
ない。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

流通（一四五・二）

想起（二四六・三）

隠れ蓑（二四七・八）

暗黙（二四八・四）

歌枕―本歌取りと構造は本質的に同じで、特定の地名が伝説と結びつき、比喻のコードとなつ

たのが歌枕である。いわば地名を隠れ蓑にした⁶の体系が確立され、

音の小詩型が身の丈に数倍する表現力を持ちえた。表層的には否定され
た歌枕は、濃厚な記憶の残滓^{ざんし}として生き、短歌形式を支える支柱となっている。

〔例3〕淡路^{あふみ}の海夕浪^{うみゆなみ}千鳥^な汝^なが鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ

たつぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器^{くら}を近江^{あふみ}と言へり

柿本人麻呂^{かきのものひとまろ}

河野裕子

「近江」はただの⁸ではなく、人麻呂の夕浪千鳥をはじめとする歌枕近江の無数の集

積を背負っていて、「昏き器」にかりそめでないリアリティが揺曳^{ようえい}する。「本歌取り」になぞらえ、

歌枕は「地名取り」とも言え、「取る」とは心を受け取ることである。

近代短歌の歌枕

歌枕には、「蜩」「蟬」など普通名詞と地名が混在し、和歌のマクラとして

短歌のキーワード、近代短歌の¹⁰となるのがそもその姿であった。近代短歌は近代

見いだしていったのである。

要旨

筆者の考えの中で最も大切と思われることを、指定された言葉を使って、百字程度の文章にまとめてみよう。
〈指定語―修辞法・短歌・構造〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・石川啄木とは、どのような人物か。

・寺山修司とは、どのような人物か。

・柿本人麻呂とは、どのような歌人か。

100